

# アクション・リサーチにおける教師の「学び」： 三者間ジャーナルの試み

倉地 曉美

## Teacher Learning through Action Research: Experimenting with the Three-person Journal

KURACHI, Akemi

キーワード：学習援助者，サポート・ネットワーク，異文化間教育，相互作用，ボランティア

### 1. アクション・リサーチにおける教師の「学び」：三者間ジャーナルの試み

学習援助者は、社会のあらゆる場にあつて、国籍、民族、人種、年齢、性別、言語、出身地、家庭環境、容貌、能力、社会的地位、その他諸々の属性や付帯状況によって、異文化の壁を隔てている人たちを共生に不可欠な対話へと誘い、対話の過程で共生に必要な態度や能力を身につけ、自らも学習者と共に成長を遂げようとする存在である。しかし、その養成方法については、一定のモデルやマニュアルがある訳ではない。そのため筆者は、これまでアクション・リサーチを通して、学習援助者育成の様々な方途を模索してきたが（倉地 1998a, b）、ここでは、サポート・ネットワークの形成期に実施した一つの活動について概説し、それに参画した教師としての筆者自身の学びの過程を明らかにしてみたいと考える。

### 2. ボランティアの問題点

近年、大学の授業や授業の一環としての課外活動だけで異文化間教育を遂行する体験学習の在り方に一定の限界を認め、地域に開かれた自発的な異文化学習の場を設定することの重要性に鑑みて、さまざまなボランティア活動を提唱する動き（興梠 1992、佐藤、馬場、安場 1993、安場、馬場 1994）が盛んになっている。行政側の梃入れとマスコミの広報活動が相乗効果を生み、昨今、あらゆる形のボランティア活動が手放しで奨励・容認されている観がある。ボランティアといっても様々な形態のものがあり、決してすべてを一概くりにして、その是非を論議するつもりはない。しかし、異文化間の教育活動に結びつくようなボランティア活動に関する限り、そこ

には、明らかに憂慮すべき点をいくつか見いだすことができる。まず第一点として、「どんなことでも、何もやらないより、やった方がよいのに決まっている」「善意でやっているのだから、悪い結果になるはずがない」といった楽観主義や、「どうせボランティアなのだから仕方がない」「悪意がなかったのだから、悪い結果が出てやむをえない」といった安易な考え方の元に許容あるいは黙認されている様々な教育に関わるボランティア行為——すなわち誰でもが教師として、つまり学習者に大きな影響を及ぼす人間として学習者の前に立ち現れるという事態——を容認することが、実は文化的相互理解を著しく妨げる大きな原因にもなりかねないのだという危機認識の欠如を指摘する声や、あるいはそれを未然に防ぐための措置に関する提案や論議が余りにも少ない点である。第二点として、ボランティアは自発的な活動なのだから、行為者のやりたいように自由自在に活動を展開させ、異文化接触の機会を増やしていけば、それが即、ボランティア自身の体験学習に繋がるという見方があるということである。確かに、どんな体験からも人は何かを学習することは可能である。が、異文化接触でボランティアが異文化に搦めとられた学習者に大きな打撃を与えてしまったような場合、それはボランティアにとって、「よい勉強になった」で済まされることであっても、学習者にとっては取り返しのつかないようなトラウマ体験になりかねないことは容易に推察されることである。それに、体験学習は、体験がどのように内在化され、それが果たして次の新しい経験にどのように有効に活かされるかということまで、長期的な学習過程を射程に入れて考えなければ、その場限りのものでは、大きな意味を持たない。従来のボランティア活動やボランティア養成では、そういった反省的視点が極めて乏しい。第三点として、現行の

パラ・プロフェッショナルやボランティア養成講座では、知識教育やゲーム、ロールプレイなどの疑似体験、あるいは申し訳程度の実習体験を行うに過ぎないものが多い。知識教育やシミュレーションがむだであるというつもりはない。しかし、実地でのトレーニングを抜きにした模擬体験や実習だけで、いきなり一人前の実践家として異文化接触の現場に出で立ち、場当たりの対応を始め、そこで何をしようが捨て置かれるという状況には疑問が多い。異文化学習者の教育に関する活動は、特にそれが不安定でデリケートな立場におかれている学習者に、甚大な心的影響を及ぼし得る危険性を常に孕んでいる。故に、担当者は現場での試行錯誤を通して、適宜勝手に何かを学んでいけばよいと安易に構えるのではなく、実地での研修の在り方にもっと目を向ける必要がある。

学習援助者育成の活動は、大学教育の授業実践の中だけで止まるべきではないという発想から、地域に開かれた実践的な異文化接触・異文化学習が重視される(倉地 1996)。その点では多くの異文化間の教育ボランティア活動と相通じるが、基本的に異なる点は、それが先に述べた異文化間の教育的ボランティア活動がもつ危険性と問題点を踏まえ、どんな援助活動をやるのか、何が達成できたかということよりも、学習援助者能力の啓培をねらいとしている点である。言い換えれば、そこでは単に有志のメンバーの恣意に任せたボランティア活動の場を与えるだけでなく、援助者としての心構えや能力を育てることに主眼がおかれているのである。

### 3. JSN (ジャーナル・サポート・ネットワーク) の構築

授業以外の場で、学習援助者能力を開発することの重要性に鑑みて、筆者は93年から中・四国地方に在る国立大学を発信基地とし、大学から広く地域(国の内外)に開かれた育成のためのJSN(ジャーナル・サポート・ネットワーク)と称するネットワーク構築に取り組んできた。この活動の目的、活動内容及びその意義については、別のところで論じているので(倉地 1996)、ここであえて詳述するつもりはないが、換言すれば、それはジャーナルを媒介とした学習援助者能力の養成と、学習援助者及びその予備軍となる人々の相互扶助のためのサポート・システムの構築を目的に始められた活動である。ネッ

トワークを構築しなければならないと考えた理由は、以下のとおりである。まず、学習援助者は教師、公務員、カウンセラーなどのような既存の社会で制度的に確立した職種ではない。それが、本人に自由選択に委ねられる役割である以上、学習援助者としての活動は必然的にvulnerable(金子 1992, 花崎 1993)なものとなり、同じ志をもった者同士が、お互いの活動を支援し合うことが不可欠となる。また、ジャーナル(倉地 1992, 1995)におけるインター・パーソナルなレベルの異文化接触体験は自己投企という点では何ものにも代え難く貴重である。もっとも、その反面独善、独断、閉鎖的な関係に陥りやすい危険性をも孕んでいる。ゆえに、個々人がそれぞれ独自の実践体験を行い、それについて意見交換や情報交換をし、違った観点から助言をしい、相互に学び合う学習支援の場として、JSNでは、ケースカンファレンスの機会を恒常的に設けている。さらに自分が遭遇している状況や問題をより多くの観点から照らし出すためにも、ネットワークのメンバーは大学関係者に限定されてはならず、その背景の多様性が鍵となる。JSNが社会人や外国人など多様な文化的社会的背景をもった人々に対して常に開かれているのは、さまざまな形の異文化が存在する現実を踏まえ、そこでの相互作用によって、自他の中に潜む異文化性を発見し、交流を通して、相互に学び合うことが何よりも貴重であるからに外ならない。加えて、メンバー相互の学習支援活動を円滑にするためには、誰もがそこで自由に自己開示できるような支持的なネットワークの雰囲気作りは欠かせないものである。ネットワークは個々の失敗例や成功例、葛藤や困難点を明らかにし、忌憚なく意見交換する場である。そのためにも、メンバー相互の信頼関係を確立することと、自己責任をもって守秘義務の遵守を周知徹底させようとする態度をネットワークの中で養うことは欠かせない。

既に論じてきたようにJSNの活動は有志のメンバーによる自発的なものであり、「ボランティア活動もまた、様々な奉仕活動を通して、いろいろな事柄を学ぶ体験学習のプロセスであり、両者には確かに相通じるものがある。しかし、ボランティア活動では、なによりもまず、社会奉仕活動そのものに焦点が当てられ、何を学ぶかはあくまでも活動の二次的な副産物となる。一方JSNでは、一人一人のメンバーが多様な相互作用によって自己学習の体験を深めていく「学び」のプロセスを最も重視する。極

言すれば、それは一人で多様な異文化に向かって発信できる能力を育てるための、また、教育的な配慮をもって社会奉仕活動ができる人材育成/自己学習に向かっての一里塚なのである。そして「学習援助者は本当は学習者であって、一方的な援助者ではない」ということを、自他の様々な学習活動から体験的に学びとることによって、メンバーはようやく異文化間教育の実践家としての、最も基本的な準備段階を修了することができるのである。

#### 4. アクション・リサーチ

ネットワーク発足当時、筆者はネットワークに参加している一般学生を初めとするメンバーを、筆者が留学生と実施していた二者間のジャーナルに参加させ、三者間の相互作用の中で学習援助者能力を培おうと試みたことがある。

三者間ジャーナル実施の決断に至ったのは次のような理由によるものである。

(a) 筆者は当時留学生クラスを一つ担当していたが、留学生の共通の悩みは「日本人学生と親しくなりたいが、留学生センターの授業と留学生会館の生活で、一般学生とは隔離された状況にあり、なかなか出会いのチャンスがない」ということであった。専門の授業で教えていた一般学生にも同じような悩みがあり、「留学生と親しくなりたいが、食堂で留学生らしい人の姿を見かけても、なかなか自分から働きかけていくことが難しい」と主張していた。そこで両方のニーズに答えるためにも、一般学生と留学生とがパーティや行事などでその場限りの表面的な接触をするのではなく、恒常的に一対一の対話的な関係を確立することができれば、相互にいろいろなことを学び合う好機となるはずである。それにはジャーナルという手法を用いることが効果的であると考えられた(倉地 1995)。

(b) 文化的相互理解やお互いの人間形成に繋がるような深いレベルのインタラクションを進めるにあたって、同質的な集団の中での付き合いしか体験したことのない一般学生を、いきなり異文化的状況にからめとられた人達や異文化に対して非常にセンシティブになっている人達のジャーナルのパートナーにするには、リスクが大きい。したがって、始めはメンバー間(ネットワークの学生、社会人メンバー)で、予め一定のピア・トレーニング(文化的・社会的背景、年齢、立場の違うもの同士によるジャーナルの交換

によって、異文化コミュニケーション能力を鍛えたり、また授業やネットワークで学習援助者としての学習経験の長い者が短い者にオリエンテーションを行ったり、具体的な事例報告や討論を行ったり、情報提供したりすることによって、仲間から学んでいくこと)を行い、それが終了した段階で、筆者と留学生のジャーナルのなかに参加させ、三者間のジャーナル交換を半年間実施することにした。それによって、ネットワークの学生及び社会人メンバーであるトレーニーは、外国人留学生とのジャーナルによる差し向かいの直接的な接触を半年間にわたって体験する機会を得ることができる。留学生側にも、そこで異文化を背景とした二人の人間と出会い、異文化接触を進める機会を得ることができるという利点がある。留学生には、ジャーナルを行う前に、筆者と二人で交換がしたいか、トレーニーを含めた三者でやりとりがしたいか、希望を聞き、それに応じてマッチングを行う。

(c) 重要なのは、留学生とトレーニーが、自発的に2者間の緊密な相互作用に「個」としての自己をコミットさせることである。留学生の授業が終了した6カ月目の時点で、三者間のインタラクションという、実地トレーニングの段階を一通り終えたトレーニーと、それまで一緒にジャーナルをしていた留学生との間で合意が成り立てば、筆者は3者間のジャーナルから抜け、彼らだけの2者間の新しいインタラクションが始まる。

(d) ただし、二者間のインタラクションにおいて気をつけなければならないのは、トレーニーと留学生が二人だけの閉鎖的な相互作用の中に閉じこもり、独断、独善に陥ってしまうことである。したがってトレーニーたちはケース・カンファレンスを常時開き、そこでメンバー相互に実践報告を詳細に行い、メンバー間でフィードバックを与え合うことが極めて重要になる。

以上のような見地から、約1年半、3期に亘ってアクション・リサーチ(McNiff 1988, Cunningham 1993)を行い、JSNのメンバーと留学生と筆者の間で延べ20ケースの三者間ジャーナルを実施した。しかし、学生にとっても、留学生にとっても、また筆者にとっても、(i) 十分な達成感がなかったこと、(ii) 表面的なインタラクションに終始してしまうことが多かったこと、(iii) 三者間ジャーナル終了後、メンバーと留学生との二者間の親密な関係作りに結実するケースが多くなかったという意味からも、こ

の試みは当初計画したような結果には至らなかった。

## 5. 考察

三者間ジャーナルの失敗原因を分析すると:まず第一は、学生達が自分で主体的に異文化学習者を探し、それに自己投企するのではなく、教師がお膳立てをした活動に安易に便乗することによって、このインタラクションは教師が責任をもって関わっているものだから、自分が積極的にコミットしなくてもよいと思わせるような状況を作り出してしまったことに起因する。学生には、「ジャーナルの交換だけで十分な相互作用を実現することは難しいから、留学生にジャーナルを受け渡しをする際に、時間を作って話をしたり、一緒にいろいろなことをしてみたりといったことが、関係の形成に必要である」といくら強調してみても、ジャーナルの受け渡し以上のことを積極的に試みる学生はほとんどいなかった。

第2点として、一対一の関係で、特に上の立場(教師)になるものが意識的に上下関係を崩そうと思えば、それを社会的・利害的な関係に縛られない空間で、実現することは可能であるが、これが三者間になると非常に難しい局面が出てくるということである。すなわち、三者がそれぞれ対等な力関係であれば、三者間のジャーナルは容易かもしれないが、一人の教師に二人の学生という関係、二人の文化的・言語的な多数派と一人のマイノリティという関係の中で、留学生は二重の意味において劣勢な立場におかれるため、対等な関係がなかなか実現しにくい。

とりわけ語学的なハンディのある留学生の場合、学生と教師という二人の母語話者の語りに対等なレベルで対応することは困難を伴う場合が多く、三者間ジャーナルは、語学能力の限界を留学生に強く認識させる場となる。

さらに第三点として、一対一の対話では、各々が、ただ一人の相手と向き合うため、それぞれが相手の発言やその発言意図に向かって意識を一点に集中させることができるし、それゆえに相手との信頼関係を築きやすい状況になる。しかしそこにもう一人の対象が介在することによって相手に向けられる意識が分散し、意識の焦点化が難しくなる。ジャーナルが三者が常時手にとって読んだり、書いたり随時できるような場に保管されていて、それぞれが好きなきに記入できれば別であるが、普通の大学のセッティングではそういう特別な場を一つずつのグルー

プのために設置することは物理的に不可能であるため、順番に回していくという手段をとらざるを得ない。三者間のジャーナルを回覧する方法はさまざまな形態が考えられるが、誰から誰に送るのか交換の順序が常に変化するような方法では、交換に混乱を来す恐れがあるし、誰の手に互っているのが不明確になりやすい。また交換の際にタイム・ラグがあり過ぎると、相互作用に支障が生じやすい。従って、タイムラグを最小限にしてかつ、混乱のない方法で3人の間でジャーナルを送るためには、aからbを経てcからaに回すという形にならざるを得ない。

(三者間ジャーナルを始めるに際し、回覧の順序について参加者に意見を求めたが、メンバーたちは、一様に最もシンプルなこの方法で回すことを希望している。)

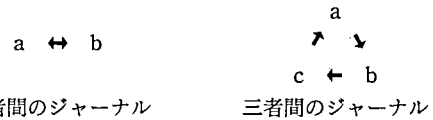


図1 二者間と三者間のジャーナル

図1のように、aとbの二者間でジャーナルをやりとりする場合ならば、aの記述を読んだbは、すぐにaに向けて直接リアクションを行い、そのbのリアクションに対してaは直接対応するという形をとり、その間にタイムラグも緩衝もない。ところが上述の方法で三者間のジャーナル交換を行った場合、たとえばaの記述を読んだbが、直接aに向けてリアクションを行ったところで、それはcを経由してからしかaの手には届かない。bが、次の送り手であるcを想定しながらcに対して記述を行っても、cからの反応は必ずaを経由してからしか、bの手には届かない。同じことがcについてもいえる。

つまり三人で相互作用をする場合、構成員は、常に残りの二人を読み手に想定して、記述を行うことになるが、自分が直接メッセージを受けた相手からも、直接メッセージを送った相手からも直接すぐにリアクションを受け取ることはできず、そこに必ずタイムラグができるし、どの書き手も自分だけを読み手に想定して反応してくれるわけではないため、どのリアクションも自分が発したメッセージにだけ直接答えてくれるような内容のものとはなりにくく、一人の対象に向けられる意識が常に分散することをまぬがれない。また三者間のインタラクションでは、二人のパートナーの記述に目配りをし、それに対応

するということになると必然的に、一人ずつの記述が長くなり、二人が書いた長い記述を読まなければならなくなると、語学能力にハンディのある留学生にはそれだけでも大きな負担になる。その上二人の相手への対応を常に考えながら話題を選び、二人の読み手を意識して記述しなければならないということも、そうした留学生には、煩わしいものとなる。

二人の書き手の記述に対する反応が十全にできそうもないと判断した留学生は多くの場合、話題を切り変えることによって問題を処理しようとする。すなわち今 a が留学生であるとする、例えば a の質問に対して b, c がそれぞれ意見なり感想なりを述べた上で、「a はどう考えるのか」と a からの発言を待って、対話を継続、発展させていこうとしても、a は、b, c の記述に対して何も回答せず、あらたな話題を選び（例えば新たな質問をする）、それに対する反応を b, c から求めることの繰り返しになってしまう。b, c が a の反応をいくら求めようとしても、a のところで、突然話題が切り替わってしまうのである。こうなると相互に深いやりとりをするということが非常に難しい状況になる。三人の間で相互作用にタイムラグが生じ、対面の相互作用ができなくなることによって、自分の記述が相手にどのような影響を与えたのかつかみにくくなるし、自分が期待するような応答を相手から引き出すことが難しくなるのが、留学生-学生-筆者の三者間ジャーナルの難点である。

さらに三者間のジャーナルの中では、次のようなことも生じる。当初は「留学生に慣れないので、留学生との直接的な相互作用をするのに戸惑いがある」と言っていた一般学生の声を尊重して、留学生→筆者→一般学生→留学生の順番でジャーナルを回し、筆者の留学生に対するリアクションを参考にした上で、一般学生が留学生への記述ができるように配慮した。しかし、これは結果的に、一般学生たちにとってすこぶる不評であった。筆者の留学生に対する対応が余りにも完全で、自分たちの出幕がないというのである。その点については、ネットワークのジャーナルに関する話しあいの中で、(i) 筆者の対応が完全なものであり得るはずはないし、それはあくまで筆者独自の社会・文化的背景から出てきたものであるから、学生の反応やものの見方と全く同じであるはずがない。(ii) 学習者が筆者の価値観や考え方だけを見て、彼らがそれを典型的な日本人のものの見方だと思ったとしたら、彼らを偏見に導くことにな

る。(iii) したがってそこにもうひとつ、新しい見方例えば、学生の独自の視点をつけ加えることがより望ましいし、三者間でジャーナルを交換することの一つの意義はそこにあるのではないかということで、折り合いは着いた。

しかし、一つの事件によって、一般学生から直接留学生へという回覧方法は非常に大きなリスクを負うことが明らかになった。それは筆者とネットワークのメンバーである研究生と留学生クラスで教えていた留学生の三者間での相互作用の中で発生した。筆者はこの研究生が外国人学習者のいる現場での教育経験豊富な社会人であったため、彼女が直接留学生の記述に対して対応できるようにと、留学生→研究生→筆者→留学生の逆方向でジャーナルを循環させることにした。ところが第2週目のときに、たまたま筆者が出張することになった。ジャーナルのやりとりにタイム・ラグをできるだけあげない方がよいと独自に判断した研究生は筆者の帰りを待たずに直接留学生から来たジャーナルに返事を書いて、それを直接相手に返してしまった。すなわち、図2のように、

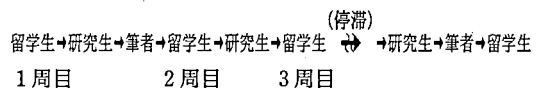


図2 停滞が生じた三者間ジャーナルの交換順序

交換の流れを変えようとしたのである。ところが、3週目、留学生のところではジャーナルは突然滞ってしまった。筆者は研究生から、「1回、先生の順番を飛ばしました」という報告と、その研究生が最近多忙である聞いていたので、多分研究生がジャーナルを書けないで持っているのだろうと判断し、しばらく静観してジャーナルが来るのを待つことにした。しかしジャーナルは、一向に研究生から送られてこなかった。筆者が出張から帰ってから、この留学生が2週間連続で授業を無断欠席したので、彼のチューターをしている学部生に様子を尋ねたところ、留学生は「怪我をして学校を休んでいるが、大したことはない。もうすぐ学校に来るから先生によろしく言って欲しい」と元気そうな様子だったという。そこで、筆者はそのことを研究生に伝え、ついでに「ジャーナルはまだ書けないのか」と聞いてみたところ、ジャーナルは留学生のところですっと滞ったままになっており、自分もつい先日催促の電話をしたのだが、留学生が「今とても大変だからしばらく

待ってほしい」との返事だったので、待っていたということだった。その次の週になって、留学生は学校に出て来たが、ジャーナルはまだ彼のところで滞ったままになっていた。筆者は研究生の記述に何か問題があったのかもしれないと思い、研究生に会ったときに「留学生がジャーナルを止めている心当たりは何かないか」と聞いたが、彼女は「何もない」と断定する。そこで「いずれ私もそれを読むことになるはずだから、具体的に何を書いたのか教えてもらえないか」とさらに聞いたところ、「私の家庭生活に関する自己開示をいろいろただけで、彼には全く何の関係もないことを書きました」という返答であった。筆者はその後、留学生に会って「ジャーナルが滞っているが、どうなっているのか」と直接正したところ、「ずっとトラブルに巻き込まれていて、研究生に返事がかける余裕がなかった。申し訳ないが、今から書くから、もう少しだけ待って欲しい」と答えた。そして留学生は、筆者に何が合ったか一部始終を報告し、彼の生活にもようやく平穏な日々が戻ってきたので、これからは学業に専念できると思うということであった。ジャーナルについては、これからも続けたいと思うが、これからは研究生を交えず、二人だけで交換をしたいという強い意志表明がなされた。筆者は彼が三者間で回覧することを強く拒む理由を聞いたが、「彼女（研究生）とのやりとりは、自分にとって大変大きな負担になるからだ」という回答であった。

その後、留学生はジャーナルを提出し、筆者は2カ月以上たってやっと2ジャーナルを手にした。筆者は研究生の記述を読み、この留学生から聞いた様々な事柄を重ね合わせることによって、なぜ彼が研究生とのやりとりを拒絶したかおよその理解ができた。さっそく研究生に会って、彼女自身は、自分の2回目の記述についてどう考えるか問うたところ、「私は彼とのラポールを確立するために、自分出来る限りの自己開示をしたつもりであり、相手の気分を害するようなことや、相手を傷つけることは何も言っていない」と自信を持って答えた。研究生の記述は、確かに、留学生を直接傷つけるようなものではなかった。が、そこには、彼女自身の個人的な生活への不満が綿々と書き連ねてあった。それを見ず知らずに近い研究生の女性から突然突き付けられたとき、留学生は彼自身が、追い詰められた状況におかれていたために、研究生に対して、誠実な対応をしよう/しなければいけないと思っても、どうにもならない

ような状況に陥ったのである。そのジレンマから生じた罪悪感が、見ず知らずの人間に、気安く重い自己開示を行った研究生に対する、疎ましい気持ちに転じていったのである。

ジャーナルがもし、研究生から筆者の手を経て留学生に渡っていたら、留学生は研究生の愚痴を自分一人で受け止め、対処しなければならぬと深刻に重く受け止めることもなかったはずである。ここでは、回覧の順序が変わったことによって、研究生のメッセージが留学生に直接大きなインパクトを与えることとなったのである。このケースでは、研究生のどのような言動が留学生にどう影響したのか、やみくもに自己開示をすることが必ずしもラポール形成に結実するわけではないことが明らかになった。研究生も、自分では、気がつかなかった行為のどこに問題があったか、問題の所在に気づく契機となった。また、それは筆者にとっても、三者間ジャーナルのダイナミズムや、回覧順序の重要性を知る上で大きな学びの機会になった。

## 6. ネットワークの転換

3期に互って実施された三者間ジャーナルの試みを総括した結果、ここでは回覧の順序を工夫するだけでは解消されない、難しい問題が今一つあることが明らかになった。それは三者間で相互作用を行うことによって関係へのコミットメントの希薄化や責任性の分散化が不可避になるということである。つまり、ここでは一般学生や研究生といったトレーニーが、相手との関係に自分一人をコミットさせる訳ではない。そこに「教師が常に控えている」、あるいは「何かがあれば教師にカバーしてもらえる」という意識が生まれ、留学生に対する関係の取り方や調整に対する配慮が十全に行われなかったり、三者間の関係を進めて行く上で、どうしても筆者に対する依存的な傾向が助長されてしまう点である。そして、二者間の間では作りやすい信頼関係や、相手との一歩踏み込んだ相互作用が、筆者・留学生・トレーニーの三者間ジャーナルではなかなか実現しにくいのである。

筆者はこの間、三者間ジャーナルに参加したトレーニーと二者間のジャーナルを平行して行い、三者間ではできなかったラポールの確立を二者間のジャーナルにおいて実現している。その事から考えると、三者間ジャーナルの難しさは単に参加者の性格特性

によるものではなく、筆者－トレーニー－留学生という三者の間に働きの動的ダイナミズムに負うところが大きいと言えるかもしれない。とりわけ、三者間相互作用の中で留学生にとって準拠集団の一員であるトレーニーが、ジャーナルの場において、いわゆる世間的な「援助者」として留学生に関わろうとし、無理な自己開示をしたり、あるいはその反対に、自分の悩みや問題をストレートに出すことを抑制したり、あるいは自己開示を避けて専ら一般的な話題に終始し、相互作用の主導権を筆者に委ねようとするため、トレーニー自身にとっても、留学生にとっても、安心して自己開示ができる場とはならない。そうしたことも三者間のジャーナルの成立を難しくしているのである。

とりわけ教師が一人と学生が二人という関係においては、一般学生が留学生に対して模範的な学生の役割を演じようとする傾向が強くなる。例えば、彼らは学生－教師との上下関係を留学生の前でことさらはっきり提示しようとするため、留学生は必然的にその枠組みに従わざるを得なくなる。つまり、三者間のジャーナルでは、ジャーナルが公的な対人関係の場として機能してしまうため、そこで、社会的な上下関係を破った対等な対人関係、セミ・フォーマルなコミュニケーションの場が実現しにくいということもある。

以上のようなことから、三者間のジャーナルの実践からは、次のような教訓を導きだすことができる。学習者援助者育成の活動は、筆者が教師として、メンバーのボランティア活動のお膳立てをしたり、あるいは最終的な活動の責任が教師に帰するようなものでは、教師のイニシアチブに依存する傾向に傾き、教師が介入をやめた後に、自発的な活動が持続・結実する可能性は乏しい。つまり学習援助者育成の活動は、異文化学習者の中にメンバーが自発的に一人で自己を投企できるようなものでなければ相手との関係や対人行動への責任感が希薄になる。その結果、かえって学習者との間に様々な問題が生じるリスクが高くなり、vulnerableな自己存在を発見するような契機にもなりにくい。そこでは、筆者が教師として立ち現れ介助するのではなく、メンバー自身がそれぞれ自分の力で異文化学習の機会を探し出し、自分一人の力で異文化に関わってみることに、そうした学習経験をどう内面化することができるか、つまり経験から一人ひとりが何をどう学んでいくかということが、最も重要である。

このような理由から、一年半にわたってネットワーク活動の中心的な活動として実施された三者間ジャーナルは、95年度の終わりに中止することになった。むしろ、この活動に関わった当時の学部2－4年生を中心とするメンバーと話し合い、合意の上で中止を決定するに至った。そして三者間ジャーナルをやめる代わりに、留学生だけではなく、もっと広義の異文化にも働きかけていくこと、学生が自分自身の異文化に働きかけていくことが重要であること、その場合一人一人の働きかけが独善的なものにならないために、ケースカンファレンスを開き、第三者の視点から各々の活動を見直してみる機会や、一人一人の異文化間交流の活動に着目し、それを皆で支援し合えるような機会を作ることを提案した。この新しい提案は、特に筆者の授業でケース・カンファレンスを中心とした活動を既に半年間経験したメンバーに強く支持された。その結果、サポート・ネットワークの活動内容は、96年度から刷新されることになったのである。

## 7. おわりに

ここでは、サポート・ネットワークにおける三者間ジャーナルの試みに焦点をあて、アクション・リサーチによって何が得られたか、主として教師の学び（注）について論じてみた。

ジャーナル・サポート・ネットワークはあらゆる可能性に向かって開かれた発展途上のネットワークである。従って、今後いかなる方向を目指すものとなるのかは未確定である。この活動がどのように展開されていくのか、ネットワークの活動が続けられる限り、アクション・リサーチを継続していくつもりである。

注 学習援助者としての教師の学びについての議論は、拙稿「異文化間の相互作用による学習援助者の「学び」のプロセス(1):アクションリサーチの意義」『広島大学教育学部紀要』第2部, 44, 173-181, 1995年, 及び, 同「内なる異文化の克服:学習援助者育成のジャーナルにおける教師の『学び』」『九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設紀要』九州大学, 50, 119-136, 1997年を参照のこと。

## 参考文献

- 金子郁容 1992『ボランティア:もうひとつの情報社会』岩波書店
- 倉地曉美 1992『対話からの異文化理解』勁草書房
- 倉地曉美 1995「異文化間の相互作用による学習援助者の「学び」のプロセス:アクションリサーチの意義」『広島大学教育学部紀要』第2部, 44, 173-181
- 倉地曉美 1996「異文化間教育における学習援助者の育成:ジャーナル・サポート・ネットワークの構築に向けて」『大学論集』25集, 129-144, 広島大学大学教育研究センター
- 倉地曉美 1997「内なる異文化の克服:学習援助者育成のジャーナルにおける教師の『学び』」『九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設紀要』九州大学, 50, 119-136
- 倉地曉美 1998a「大学での異文化間教育:内なる異文化の克服と共生の視座から」江沢一公編『トランスカルチュラルリズムの研究:文化人類学と異文化間教育学の視点』明石書店
- 倉地曉美 1998b「学習援助者育成の異文化間教育」『広島平和科学』20, 広島大学平和科学研究センター
- 興梠寛 1992「国際ボランティアとしての人材育成」『現代のエスプリ 国際化と異文化教育』至文堂, 153-159
- 佐藤恵美子, 馬場尚子, 安場淳 1993「実践報告:ボランティア参加型学習活動」『中国帰国孤児定着促進センター紀要』第1号, 33-61
- 花崎皋平 1993『アイデンティティと共生の哲学』筑摩書房
- 安場淳, 馬場尚子 1994「日本人ボランティアと学習者との交流活動プログラム活性化のための事例研究:ボランティアの視点から」『中国帰国孤児定着促進センター紀要』第2号, 139-200
- McNiff, J. 1988 *Action research: Principles and Practices*. London: Routledge.
- Cunningham, J. 1993 *Action research and organizational development*. Westport: CT: Praeger